

* 答はすべて解答用紙に書きなさい。

* 句読点・記号は字数に数えます。

* 本文は出題の都合上、一部変更しています。

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

都立浅川高校吹奏楽部(Ⅱ吹部)は全日本吹奏楽コンクール金賞受賞を目指し、夏の予選に向けて練習に励んでいる。そこへ、野球部の応援演奏を依頼された。

ミーティングを終えると恵那凛が奥谷遙先輩のところへ飛んでいった。「あたし、どうしても自分のクラリネットをつかって応援したいんです」「エナリンのつて、それ、買ったばかりでしょ。やめた方がいいよ。壊れたらたいへんだよ」

「いいんです。これを吹きたいんです」

野球部の松原くんを応援するために吹部へ入っただけあって、気合い十分だ。それにしても、体が弱いらしく、週一回は学校をやすんでいる恵那凛が灼熱のスタンドに耐えられるのだろうか。ちよつと心配だ。

わたしにとってもスタンドでの応援は楽しみ。なにしろ新しい楽器を演奏することができるので……。

① **オクガイ**で音楽隊が行進しながらマーチを演奏する。② **サイ**、からだに管を巻き付け、巨大な朝顔を前に向けて歩いている隊員を見たことがないだろうか。

あの楽器はスーザフォンといい、世界のマーチ王として知られるJ・P・スーザというアメリカの作曲家によつて、低音の演奏形態の幅を拓けるために考案されたものだ。【A】スーザフォンはチューバ奏者によつて演奏される。

人間と楽器がまるで合体しているかのような様相を呈しているだけでなく、朝顔の部分にはローマ字で母校の名前がプリントしてあるので、ふだん目立たないチューバ担当者は珍しく③ **キャツコウ**を浴びているような感覚にひたることができのるのだ。

わたしにはうまくできないけど、つわものになると高くア掲げてくるくるさせる「スーザ回し」という技をつかうひともある。注目されたいというわけじゃないが、① やつぱり一度はスーザフォンを体験してみたい。

② ドンちゃんには「浮気するんじゃないんだよ。おまえは重すぎて持つてけないから、④ **おルス番ね**」と言つておいた。

【B】頭痛のタネもあった。西大寺の存在である。

だいたいヤツは全体ミーティングにすら顔をださない。合奏にだけは参加するものの、① 終わるやいなや誰とも話すことなく消えてしまう。

その日も帰ろうとする西大寺を追いかけて、ようやく捕まえる。

「ちよつと待つて。聞いたかもしれないけど、野球部の応援で演奏することになったの。これ楽譜だから」

と手渡そうとしても、

「あ、オレいいから。だつてオーボエだもん」

受け取りを拒否する。

「あなたぐらいのレベルだったら、これぐらいのペット(Ⅱトランペット)はすぐに吹けるでしょ。学校の② 備品つかつて参戦してよ」

「やだよ。だいたいなんでオレが野球部の応援なんかしなきゃなんねえんだよ」

「吹部が依頼されてんだから当たり前でしょ。楽器やなくなつたつて、メガホン部隊で参加しなきゃダメなんだからね」

「冗談じゃねえよ。オレ行かねーから」

西大寺は大声で叫ぶと、

③ 応援して欲しいのはこっちの方なんだよ」とつぶやき、走り去る。

試合前日の合奏にも西大寺はあらわれなかった。

さつそく加藤蘭先輩が茶髪をなびかせながらやつてくる。

「鑓木、なんで西大寺が来ねえんだよ。奥谷とか困つてんじゃないか。

下級生にしめしがつかねーんだよ。おめえ部長だろ、なんとかしろ」

厳しく詰められる。

「すいません。メールも打つたんですけど……」

「なんて返事が来たんだよ?」

『おせつかいすんじゃねーよ』とだけ……」

「つたく、つかえねーヤツだな」

わたしは緊張のあまり固まつてしまった。威厳なものもない④ 名前だけの部長なんだとあらためて実感する。情けなくて消えてしまいたい。

5 味方にはなつてくれないということはわかつていたけどいちおう相談してみようと思ひ立ち、すでにミタセン(Ⅱ顧問の三田村先生)の要塞と化している音楽準備室へ行つてみた。

「先生、西大寺が野球部の応援に来ないつて言つてます」

「へー、どうしてなんだろうね」

「さー、やつぱり元野球部だから、いろいろ複雑な気持ちとかあるんじゃないですか」

「えー、西大寺くんつて野球部だったの? 知らなかったなー」

なんでもミタセンには言つたはずなのにまるで覚えていない。生徒の個人情報など関心がないのだろう。

「まあ、行きたくないならしょうがないね。応援つて自主的にやるもんだもん」

予想どおり、なんの手助けもしてくれない。このひとは集団の規律だとか、ルールというものにはまるで頓着しないのである。

だいたい野球部の応援自体に【C】興味を示さず、

「わるいけど、全部任せただから」

とすべてをわたしに丸投げだ。コンクールのことしか頭がないのだろう。

なんでわたしはこんな男のもとで部長をやっているんだろう。いつもいつも怒られるのはわたしばかり。心の底からイヤになつてきた。

ところが翌日の出発時間直前になつて西大寺はあらわれた。

「あつ、西大寺、来たんだ」と声をかけると、

「ざけんじゃねーよ。このおせつかい女。いらねーこと言うなよな。てめえのせいなんだよ」

逆切れされる。

なんで怒られるのかさつぱりわからない。ポカンとしてみると、【D】

携帯電話を押しつけてくる。

受け取つて画面に目を見ると、「三田村です」の文字が。

思わずメールの文章を追いかける。

「西大寺くんつて野球部やめたんだつてね。鑓木さんから聞いた。監督の野本さんに『西大寺くんは野球部の応援に行きたくないつて言っているんですけども、イジメられたんですか?』つて聞いたら、『そんなことありません。西大寺のことはいまも気になってます。そんなことを言っているんですか?』つて悲しそうな顔をしてたよ。でも応援したくないひとに応援されたら野球部だつて困っちゃうよね。来たくないなら来なくても全然構わないからさ。この時期は暑いもんね。体調壊したら元も子もないよ。それよりコンクールをがんばろう。じゃあね。バイバイ」ひとの気持ちに② 逆なでするような文面に驚く。

野球部の監督まで巻き込んでしまったので、ミタセンの言葉を打ち消すため、来ざるを得なくなつたのだろう。

「じゃあ、西大寺の分のトランペットも積み込まなきゃ」と言うと、

「楽器はいらねえから」と再び怒鳴られる。

なんで毎日いろんなひとからこんなに怒られなきゃいけないんだろう。それにしてもウ肝心のミタセンの姿が見当たらない。

めずらしく野々つち(Ⅱ野々宮先生)が引率に来ていたので聞いてみると、ミタセンは体調不良のため自宅で静養しているのだという。

ズルやすみに違いない。

八王子市民球場に着くと打ち合わせどおり、めいめいが各自のポジションに座つた。

西大寺だけポツンと離れたところに腰掛けたので、あわてて連れ戻し、わたしの横に押し込む。放つておくと、なにをしでかすかわからない。

先輩に怒られるのはわたしの方だ。

先発は二年生エースの松原くん。恵那凛のお目当てである。事情通の副島奏によると、去年の秋までは西大寺とエースを争っていたひとらしい。ヒジのケガがなければ、マウンドに立っていたのは西大寺だったと聞いている。それが原因かどうかかわからないけど、ヤツはあいかわらず最高潮に機嫌がわるい。

サイレンが鳴り、試合開始。相手は私学の東京文理大付属高校だ。

「文理つて強いのか?」

「ああ、毎年ベスト4まで確実に進んでるし、一昨年の春には甲子園に行つてる」

「勝てるかな?」

「勝つっこねえじゃん」

「どうしてそう思うのか? そんなに力の差があるのか?」

「だつてaがいねーんだぞ」

西大寺は吐き捨てるように言い放つ。

序盤はお互い得点なく、スコアボードにはゼロが並んだ。浅川高校の攻撃は淡泊だったため、「サウスポー」「タッチ」といった吹部の③ 十八番

も最後まで演奏できずに終わつてしまう。(中略)

五回の表、松原くんは相手に連打されて続けざまに二点を失う。

そのたびに恵那凛の悲鳴が届き、崩れ落ちる姿が目に入る。

6 西大寺は無表情なまま、だるそうにグラウンドを見つめるのみだ。

七回に入ると暑さのせいで頭がくらくらしてくる。ウチの学校の備品であるスーザフォンは合成樹脂でできているので、チューバに比べると軽いのだが、それでも左肩で支え続けていると次第にめりこんでくるように感じる。首もとにはタオルを巻いているものの、直射日光は容赦なく照りつけ、汗はとまらない。(中略)

裏の攻撃になると浅川高校にひきびきのランナーがでたので、すぐさま曲目を「チャンス法政」にスイッチ。

「かつとばせー、あ、さ、か、わ」

力強く声援を送る。

わが校吹部の演奏はとても気合いが入っていた。とりわけ榊甚太郎は二メートルもあろうかと思われるハチマキを締め、大学の応援団のようなキビキビとした動きでバスターを打ち鳴らす。あんな風体をしている榊甚太郎だが、遠目に見るとなんかカッコイイ。(中略)

その横では、ふだん鍵盤打楽器をやっている北川真紀がスネアを叩いているのだが、よく見てみると、それは榊甚太郎の「健太」なのである。ほとんどの部員は自分の楽器に名前をつけ、ときには話しかけることも少なくない。しかし甚太郎の場合、話しかけるといふより、会話をしていると言っている。真剣に相談しているときすらある。そんな大切なヤツの分身である「健太」を後輩の北川真紀につかせていた。パーカッションパートの団結力を感じさせる。

1 吹部が丸となって応援するなか、ひとり西大寺だけがあんぐりと口を開け、だらしないうでリズムでメガホンを叩いている。

浅川高校の攻撃はノーアウトランナー一、二塁となり、九番の松原くんは打席がまわった。

8 恵那凛のクラリネットが一段とパワーアップする。

しかし初球から立て続けに送りバントを失敗したうえ、三球目を強打するとセカンドゴロでダブルプレー。バッティングの方でもブレーキになっている。

2 西大寺のやる気のなさが伝わったのか、後続も簡単に打ち取られ、この回も零点に封じられてしまった。

八回の表に入るやいなや、前方で騒ぎが起こる。

「渚、渚、大丈夫？」

アルトサックスの大磯渚が倒れたようだ。あわてて駆け寄ろうとするも、巨大なスーザフォンが邪魔になって身動きがとれない。大磯渚は奥谷遙先輩と長渚詩織先輩に支えられ、日の当たらないところに寝かされた。いつもは妖気さえ感じさせるツインテールも今日は元気がない。アニオタで完全インドア派の渚にとって、スタンドの暑さは経験したことのないようなものだったのだろう。9 渚、あんたはよく戦ったよ。あとはわたしたちががんばるから。

3 九回の表になると西大寺がはじめてみずから口を開いた。

「まずいな」

「どうしたの？」

「少し球がうわづつてきた。松原の握力が落ちてる」

「そうなんだ」

「もう限界かもしれない」

5 シンコクな声色だったので思わずスーザフォン越しに西大寺の方を見やると、拳を握りしめ、いつの間にか険しい表情になっている。

いやな予感的中し、フォアボールのあと、連打を浴びて一点追加された。松原くんはマウンドを降り、ライトへまわる。リリーフは後続をなんとか断ち切った。これで三対〇。

そして最終回。汗みどろになりながらも「AKBメドレー」で声援を送る。東京文理大付属の吹部も強豪だが、音では絶対に負けていない。届け、わたしたちの思い。負けるな野球部。

ここ数カ月、朝から晩まで楽器を吹いているので、厳しい練習が続けてきた彼らの気持ちも少しだけわかるような気がする。三年生にとつては最後の大会だ。勝敗が決するまで戦い抜いて欲しい。

でも浅川高校の攻撃を散発三安打に抑えている相手エースの球速は落ちていないみたいで、簡単に二死となってしまう。

迎えるバッターは九番の松原くん。まだ一度も塁にでていない。

6 バンジキウウすと思った瞬間だった。

4 西大寺は立ち上がると、前に座っていた清水真帆の肩を叩き、「ゴメン、カして」

と言うやトランペットを奪い取り、松原くんの方に向け、

「パラパラッパラ」

ファンファーレを鳴らした。

吹部は応援のサイ、音を相手側スタンドへ目掛けて発することになっている。

8 キンを犯して勇気を送ったのだ。

5 初めて聞く西大寺のトランペット。

透きとおるようできて力強く、スタンドのなかを突き抜けた。打席へ向かおうとした松原くんがこちらを振り返る。

その音が合図だった。

吹部は一体となって「コンバットマーチ」を奏でる。みんな疲れ切っているけど渾身の演奏だ。

恵那凛ひとり、もはや楽器をあつかうことすらかなわず、激しくしゃくり上げながら目をつぶり、手を組んで祈っている。

八幡太一は西大寺に負けじと立ち上がってトランペットを吹き鳴らした。みずからの恋敵が打席に立っているにもかかわらず、9 セイツパイ音のエルを送っている。

ファールで粘った松原くんは小飛球をライト前に落とし、なんとか出塁した。

スタンドに歓喜が広がり、すぐさま「天理高校のファンファーレ」に切り替わる。野球だけでなく吹奏楽でも強豪である奈良の天理高校は、誰もが知っている応援メロディーを数多く持っている。

浅川高校は、そのあと、ヒットとフォアボールでツーアウトながら満塁となり、三番キャプテンの畑田さんが打席に立った。

野球にうといわたしでも、ホームランができればサヨナラ勝ちだということだけは理解できる。「ダッシュュKO」で後押しした。

ツースリーからファウルで粘った七球目。鋭い打球がレフト線に放たれた。

「キヤー」

全員が演奏をやめて立ち上がる。

スタンドをめざしてきれいな放物線を描いた白球はフェンスの手前で失速し、回り込んだ相手レフトのグラブに収まった。

「ウー」

サイレンが鳴り響く。

西大寺は清水真帆のトランペットを握ったまま立ち尽くしていた。

バスターやメガホン、スーザフォンといった荷物を球場横にきているトラックへと運び込む。さすがに疲れ切っていて、誰ひとり言葉すら発しない。三十メートルほど離れたスタンドの陰で、野球部員は車座になり、監督の話を聞いていた。

距離があるにもかかわらず、選手たちの嗚咽(おえつ)「むせび泣き」が届く。「ありがとうございました!」

野球部が解散になると、ひとりの部員がこちらへ走ってきた。

「西大寺、西大寺」

見ると松原くん。西大寺は困ったような顔をして立ちすくむ。

「キヤー、先輩だ」

恵那凛は涙で崩れきった顔をゆがませ、こきざみにはねる。

「西大寺、ゴメン。ゴメン、おまえの分まで、おまえの分まで……。がんばろうと、思ってた……。ゴメン。力がなくて。おまえがいてくれたら勝てたかもしれないのに……」

松原くんは涙で言葉にならない。

「応援、ありがとう。最後のトランペット、うれしかった。オレはホントにダメダメだったけど、塁にでたのはおまえのおかげだ。10 ありがとう。でもゴメン」

11 西大寺の手を握りしめる。

野球部の野本監督やキャプテンの畑田さんもやってきた。

「三田村さんから聞いたよ。吹奏楽部に入ったんだってな。12 野球部の甲子園みたいなコンクールをめざしてるんだろ。西大寺の力でみんなを連れていつてやれ。応援してるぞ」

「オレたちはもう引退だけど、おまえにはあと一年残ってる。三年野球部員の気持ちを胸に吹部でがんばれ」

それだけ言い残すとみなは小走りで行っていった。

10 感キワまった恵那凛は泣いていた。

八幡太一も半分泣いていた。

西大寺はあいかわらず立ち尽くしていた。じっと自分の手のひらを見つめながら。

気のはやいニイニイゼミの声が耳に届く。

わたしたちが気づかぬうちに夏はもうそこまで来ていた。

a にあてはまる二字のことを本文の一枚目からぬきだしなさい。

問11 — 6 「西大寺は無表情なまま、だるそうにグラウンドを見つ

問11 — 6「西大寺は無表情なまま、だるそうにグラウンドを見つめるのみだ」とありますが、当初このようであった西大寺の様子が大きく変化していく部分を①～⑤の【】から二つ選び、番号で答えなさい。

問12 — 7 「ふだん鍵盤打楽器をやっている北川真紀がスネアを叩いている」とありますが、「わたし」はこのことからのよう

なことを読み取っていますか。三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

問13 — 8「惠那凜のクラリネットが一段とパワーアップする」とありますが、その理由がわかる一文を本文の一枚目からぬきだし、はじめの五字で答えなさい。

問14 ― 9 ― 渚、あんたはよく戦ったよ」とありますが、「わたし」は渚のどのような行動をそう評価したのですか。二十五字以上三十五字以内で答えなさい。

問15 — 10「ありがとうございます。でもゴメン」とありますが、この時の松原の気持ちの説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　西大寺がせっかく応援に来てくれたのに、涙で満足に話せず
恥ずかしく思っている。

イ 西大寺が応援してくれてうれしいが、エースの座を奪ったことを気にしている。

ウ 西大寺の応援でチームの一体感が生まれたことを認め、それ

ウ 西大寺の応援でチームの一体感が生まれたことを認め、それ
までやる気を見せなかったことを悪いと思っている。

エ 西大寺が最後に力を与えてくれたことに感謝しつつも、試合
に負けて申し訳なく思っている。

問 16 — 11「西大寺の手を握りしめる」とありますが、西大寺自身も松原の気持ちを受けていることがわかる一文を本文から二十字以内で抜きだし、はじめの五字で答えなさい。

問17 — 12「野球部の甲子園みたいなコンクールをめざしてる」とありますが、この三田村先生のことばから、野本監督は三田村先生のどのような思いを感じましたか。最も適当なものを次の

西大寺は野球部をやめてもまつとく困つてゐないことを顧問らを選び、記号で答えなさい。

ア 西大寺は野球部をやめてもまったく困っていないことを顧問としてアピールしたい。

イ 西大寺は吹奏楽部に入って、野球部と同じようにがんばっているということを野球部の人たちに伝えたい。

ウ 吹奏楽部は野球部よりチームワークにすぐれているので、そのコツを教えてあげたい。

工 吹奏楽部もたいへんなコンクールをめざしているのに、野球部の応援をしていることに感謝してもらいたい。

13 — わたしたちが気づかぬうちに夏はもうそこまで来ていたとありますが、これはどのようなことを表現したものでしょうか。

そのことを説明したものととして最も適当なものを次から選

「わたし」は試合とコンクールの結果を重ねてしまひ、野球遊び、記号で答えなさい。

「わたし」は試合とコンクールの結果を重ねてしまい、野球部の敗戦を受け止められず、セミの声を聞くことでつらい現実から目をそむけようとしているということ。

「わたし」は涙を流す部員たちとの間に熱意の差を感じ、コンクールに向けて部員の気持ちが悪くなるか不安になったと

ウ 「わたし」は夢中になつて吹奏楽部の活動をしてきたが、ふと時間の流れを感じ、コンクールが近づいてきたのに気づいたということ。

エ 「わたし」は野球部の応援で苦しい思いをしていたが、それがようやく終わって楽しい夏やすみが訪れるのだと期待して

でク①1

III

問
9

問
16

受験番号